

カワシンジュガイ

人間は水無しでは生きてゆけません。川や湧き水など自然の水源地で生活していたアイヌの人々にとっても水が大変重要な



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

流れないので殻が薄いそうです。カワシンジュガイはフランス料理でもムール貝として一般的な食材であるように、アイヌの人々も生で食する

ものであったことは言うまでもありません。ですから、アイヌの村々では、水を汚すことがないよう細心の注意が払われていました。例えば、洗濯や食器洗いも川で直接行わず、水を汲み上げて川から離れた場所で行っていました。ましてや川で用を足すなどとんでもないこととされ、子どもが川でおしっこをしたりすると厳しく叱られたそうです。それは、その川水を皆が飲むからでもあります。

また、川の水を汲むときも、川の神を驚かさないう、また水汲みの許しを請うための儀礼として、柄杓の底で川面をたたいてから水を汲んでいたとのこと。北欧でも、森の井戸から水を汲むときには、森の女神にお願いするため、井戸の蓋をたたいてから汲むという古くからの習わしが残っているところがあると聞きます。

最近清流として有名な千歳川をカヌーで下るという経験をしました。千歳川の水が格別きれいなのは水質日本一で知られる支笏湖を水源としているためです。そのおかげで水がきれいな川にしか生息しないというカワシンジュガイが今でもみられます。大きなカワシンジュガイが透明な流れを通して川底に見られるのは感動的で、アイヌの人々が自然の中で自由に暮らしていた時代が一瞬蘇った気がしました。カワシンジュガイのアイヌ語名はビバ(またはピバ)です。富良野に美馬牛という地名がありますが、これはアイヌ語のビバウシ(biba-カワシンジュガイ us-群れて生息しているi-場所)に漢字を当てはめたものです。カワシンジュガイに対しヌマシンジュガイ、アイヌ語ではトーピバ(to-湖沼のpipa-ピバ)もあり、こちらは水が

ほか、炒め物、汁物の具材として活用していました。また貝殻が固くしっかりとしているのと丁度人間が手に握るのに丁度良い大きさのため、2カ所に穴をあけて紐を通し、穀類の穂摘みの道具として使っていました。後に金属製のものも使うようになりましたが、これはカニピパ(kani-金属のpipa-カワシンジュガイ)です。ところで、カワシンジュガイとサクラマスとは密接な関係があります。サクラマスは川の最上流まで遡上し産卵しますが、カワシンジュガイの幼生はこれらの魚のエラにくっついて川を移動し、魚が呼吸すると川床に落ちてそこで育つという仕組みです。不思議なことにカワシンジュガイの幼生を運ぶのは、サクラマスまたはサクラマスの河川残留型であるヤマメに限られています。このため、土砂災害防止を目的として築かれた砂防ダムのためサクラマスが遡上できなくなった川や、川底にコンクリートブロックを敷設した棲息地からはカワシンジュガイが消えてしまいます。カワシンジュガイは成長するのに非常に長い時間がかかるため、一度消えてしまった貝を元に戻すのは大変難しいとのこと。カワシンジュガイは世界中で数を減らしており、環境省の絶滅危惧種のリストにも載っています。アイヌの人々の川の水を汚さないという努力は、このような表立ってはわかりにくい、生物間の互助関係をも助けていたことになるわけです。近年、ダムや河川に魚類の遡上に配慮した魚道が整備されるようになりました。私たちは自然環境を保つことが生物多様性を維持するためにどれほど大切なのかをよく理解し、自然に負荷をかけないようにさらに努力を続ける必要があります。



*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリィマン社、2019年)、『平成20~令和4年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~14』(北海道教育委員会、2008~2023年)等。